

学位論文の要旨

保健学専攻	生涯保健学 分野 成人保健学 領域	氏名	阿部 裕一
題 目 Availability, usage, and factors affecting usage of electrophysical agents by physical therapists: a regional cross-sectional survey (物理療法機器の保有状況、使用状況、および使用に影響を与える要因：理学療法士に対する調査研究)			
要 旨 【背景】 物理療法は、”use of electrophysical and biophysical energies for purposes of evaluation, treatment and prevention of impairments, activity limitations, and participation restrictions (電気物理学的または生物物理学的エネルギーを用い、評価や治療、障害や活動制限、参加制約を予防するため、治療手段として使用する)”と定義され、理学療法士、作業療法士、アスレチックトレーナー、健康産業に関わる人などに用いられている。 物理療法が理学療法士にとって核となる治療法の一つであることは知られているが、物理療法教育、使用方法について、エビデンスやトレンドなどを元に再評価が必要であるという議論もある。それに関する longitudinal study は日本および海外では行われておらず、 cross sectional study について、海外では過去数十年の間に数カ国で実施されており、物理療法は現在も用いられているものの以前ほどではないという報告がされた。日本でも実施されているが、多くの研究が10～20年前に発表されたものであるのに加え、不十分な報告や、被験者の偏りなどもあり、物理療法を使用する際に影響を与える因子については報告されていない。 本研究では、長野県内の理学療法士に対し調査票を配布し、物理療法機器の保有状況、使用状況、および使用に影響を与える要因について調査を行うことを目的とした。本研究は信州大学医倫理審査会の承認を得た。 【方法】 2013年度長野県理学療法士会会員所属施設名簿を元に、登録されている245施設、1,571名の理学療法士に対し、2014年7月所属施設宛にアンケートを送付した。22種類の機器について保有状況、使用状況、使用に影響を与える要因、これらを集計した。また、使用状況と物理療法機器を使用する際の confidence との相関についても検討を行うこととした。			

【結果】

有効な返信数は 170 施設 (69%)、1099 通(70%)だった (男性 655 名、女性 436 名)。回答者の平均年齢 31.8(±8.4)歳、臨床経験年数 8.6(±7.9)年、県外養成校卒業者が 766 名(70%)であった。

保有状況について、ホットパックが最も多く (88%)、低周波治療器 (76%)、超音波(68%)の順であった。使用状況についてはホットパックが最も使用されており(72%)、次いで超音波 (61%)、コールドパック(59%)の順であった。物理療法に対する confidence についてはホットパックが最も高く (75%)、次いでコールドスプレー(49%)、超音波(44%)であった。物理療法機器を使用する際に影響を与える因子では機器の保有状況が最も高く (80%)、過去の経験(79%)、研究によるエビデンス(79%)が続いた。confidence と使用状況について、紫外線、iontophoresis、magnetic field 以外に相関がみられた。

【考察】

今回調査対象の地域では、物理療法機器は多くの病院で保有されていることが明らかとなった。20 年前の報告と比較し、パラフィン、赤外線、マイクロ波などいくつかの機器については減少傾向にあった。一方で、ホットパック、超音波は大きな変化なく保有されていることが明らかとなった。使用に影響を与える要因について、外的要因 (機器の保有状況、エビデンス、ガイドライン、教科書、プロトコル、デモンストレーション) と内的要因 (過去の経験、教育) に分類することができた。外的要因である機器の保有状況と内的要因と直接的に関係がある confidence は、物理療法の使用に最も直接的な影響を与えているものと考えられた。外的要因を変化させることは困難であるが、内的要因については教育やトレーニングなどにより影響を与えることができると考える。この外的要因、内的要因の関係性は複雑で、物理療法の変化を理解するには更なる調査が必要である。